Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

栃木県立図書館

inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

栃木県立図書館

牛音全部

1 024

12.2

上之行

あぐらに穴を明ける百両

あぐらに穴を明ける百両
かいて、まん中に焼(くぼ)
の金を移(かえ)るとの意。
なるが、もし両意ってと
残してはとの用心から
し柳には百両をはどけは人をしさらせる
ということのある。百両の包(つつみ)を解くと、そこ
に名合わせた人(とと)金が、一斉(いっせい)に後(あと)ずさ
りをしたというのって、つまりは、五一

コクヨ 10×20

前田タカ氏 寄贈

栃木県立図書館

不安などを生じた場合、自分にその証いが欲しいというような場合からである。十利というものに対する時の人達の気持もそこに頼むような、また人情の機微をよく穿うがっているのである。

しかしこの時代は、金は武士、銀は町人、銅は百姓と夫々(それぞれ)決まれ、通貨にも何か階級性というようなものがあって、一般町人は、十利で買いものをするなどということは滅多にないのであって、十利を使う時は、それを両替して、先ずこまかい金(銭)に変(こう)して貰う。し

栃木県立図書館

かしその内引は、時
父ぶしも法定のそ
ために場ふるので
から、「気持として
な言葉かこれに使
心須は全のな
「印鑑」とは西
打銭」とれ称した。
に対して文前後
い高瞰したとあ
四ヶ文はしたの
なかと思われる。

栃木県立図書館

十二ノ一

今宵はこまかに しるかが最後、お足とも呼ばれる通り、どうも何処かへ出掛けましてしまうというのである。今の4円50銭がいつまでも4円50銭のままでいてくれますようにという祈りが詰まれたが、この事きはめた上で西かへ同じ値打である。

そういう風に、十銭札もそうしたらもういつまでも一両が一両でなくなっていくのて、さてどうしたものかとこれを両替するまでは、それぞれに思案もあることで

栃木県立図書館

028

あろうとしたのである。

蚤（のみ）の様（よう）な物（もの）あろうが、その人（ひと）向（むこ）うを張（は）って大（おお）きな象（ぞう）に鉄（てつ）を買（か）い

これは同（おな）じ西洋（せいよう）でも、いやせい一杯（いっぱい）金（かね）をためて

という譬（たとえ）を行（や）かな。

（一定（いってい）量（りょう）目（もく）の郵便（ゆうびん）おもてであったかも知（し）れないが、）

まさか、この句（く）のように十七文（じゅうしちもん）貧乏（びんぼう）におくれる十七年後（じゅうしちねんご）の昭和二年（しょうわにねん）がやってくる）か、いずれにせよ寿公人（ことぶきこうじん）の身（み）で鉄（てつ）を買（か）うということは、ケタハズレ加減（かげん）がましく、何（なに）かお大尽気分（おおじんきぶん）をヨわらに望（のぞ）むのがあった意（い）味（み）なら。従（したが）って

コクヨ 10×20

栃木県立図書館

029

祖父さんて見ると女の子へ
という句は同志に見えている。
うえかいかかる後の両方
後になってから金をくずしに来る。何に
おかいのか人用なのかを知らなかった、買いものの
なんとなくもう去年の時から、あしたの朝でもよさ
そうなものを、急いで来た金でではあるか
のように話すというのである。この方は
十判であるかも知れぬ。
一ぐくわへて内に引く鳥

コクヨ 10×20

栃木県立図書館

030

この句のつくられた事情から見て、これは銀貨などなく全部銅貨であったのであろう。さて全体は吾々これのものの、何か面白手を使う用事があって、これを一時口に預けたか、落してはいけないようにしてとそれを大事と、その面白さをもっと内に引くしは、つまりカにそれを頼りないというのであって、崖の上の松にお三がとらるる前句のかかって面白い。

「前正面」という言葉はあるが、これは金を

コクヨ 10×20

くみえたのではなく、
思わずニコリとさせられるのです、ついつい
うとうと、三分という
してしまうというのが
実一到価は三分なり
いように、寸暇を惜んで
寂女の掲代金である。
三分と銘にすべし
三分は二両の四分の一に当て、
定相分の四果之に

ではこれ位ということに
ヨイト花野買いに来
なるというのであって、
のそれを言っているの
である。

一分指ってそれを引
一分は中級並女の場
待てどもとうとう女は
たらしいと知った小者が
ところでそれそれに報
ことにして、という風

栃木県立図書館

10

独り者の小作人に頼まれて、妹として嫁ぐことになると思いがけない。それにしてそれで引かれる「責」とはよくこれを指して言うのである。

十枚四つは三銭に、十枚は五銭、いわば十枚金の色で、一分金の一分金で四枚と、それは同じ価値のものでも十銭一枚を持ってなるか、同じ価値のものでも十銭一枚を持つことである。これが四つ

144/1号へ

栃木県立図書館

のであって、まるにうとという、何か因果(いんが)まぎれな女の姿(すがた)を見(み)ているようなところも見(み)える。

百両(ひゃくりょう)は活(い)きた神(かみ)のうらを行(ゆ)き

これは君(きみ)、城(しろ)の因果(いんが)まで通(とお)る女(おんな)のまごころとして、百両(ひゃくりょう)という金(かね)はわるく言(い)いのわしたものを承知(しょうち)しないから、代(だい)官(かん)の跡(あと)をつぐと、ほんとうに身(み)を売(う)る因果(いんが)に、成(な)ってその金持(かねも)ちの金持(かねも)ちに、そこにかたずかぬことを言(い)って、神(かみ)のうらを行(ゆ)きこれは縁(えん)ならぬ縁(えん)、世(よ)の神(かみ)のうらを行(ゆ)きこれは縁(えん)ならぬ縁(えん)、世(よ)

栃木県立図書館

嫁さという意味である。

金のない方（法）

それで家のため、親

を指すという様な

時の娘である。「法を

かねのその人へ、

きらめてなどと書き送

はこの句で金のない方

いよのを見ると、イヤな

女のことを詠っているの

コクヨ 10×20

栃木県立図書館

何にしても

西の中は親と金とにしばられて

というのがその頃の、若い男女の等しき嘆きであった。

金を儲けふ商売

金を儲けると仕事

人の相手ならば何とかやっつけようもあるが、そういう金に手のおしようのないものとつうつうのであって、仕事よ商売よ、口惜しいかことのところは胸をさすり、腹をへよ

栃木県立図書館

り仕方がないというのである。

よい男運のつよさは金がなし

芝居などで男前がよくて、金が何とか田舎になる人向けせていたなら。そう思うと、全がないということは、却ってこの種の男に幸いしているというのである。つまり、お金に縁のないそれが田舎プレーオとなるからこそ、学問に言及することからの忠兵衛さんのように、例えば菊池寛の父母を泣くことなら。時程言われてみれば

144 2月3

こそもっ運のつよさ
男金とカはなかりけ
に対する朝(あさ)りでなく
もよさそうである。

財布でよって直(すぐ)に勤
そういうのに教(おそ)
に恵まれなかった男と
をいいことに学から引く
か、内湾(うちわん)の浦に引く網
そういつまでも言(いう)
ぬ答はなく、つい

栃木県立図書館

16. 038

にこのお幸福め、もう
離れないでいるでしょう。
そんでもさすがに
が親で、さアこを行
別れ方で行こうというの
まで来ること

異見のときされる
となるか、更らに悪く改めると
という事になろう。

○ 試別せうお

悩いと言ってそれは

栃木県立図書館

その所業に対して、人間はやはり可
哀そうな我がままである。せめて当をするのもここで因
持ちを改めさせようとしても、いわば元の静寂打
ということろ。「邪魔された」と言
いながらも、イヤとは拒絶する訳にも手伝
ないのである。どうしても何処へでも出せと言
い張るのを見ると、憎むべき悪魔の甘言に
乗(イチまつ)(ヤ)の銭
黒風北さびりと金も来て

栃木県立図書館

人には甘えていても、強いことを言った手前、昔、知人した男へ男親からの手紙をもらったなど。従ってそれ男にとは言っても女親からの、ひそかな手紙と見てよかろう。それに文面ではいりながらもその郭公なんかしかの金を封じ込んで来るということのであって、これも親の情、というものであろうそれその甘やかしかと見るのしかしこんなことでは男よりなかな

か眠か醒め西へ。

金の減るわるい男幸の雨のさ

栃木県立図書館

金を強めるなどそれに汗をしなければならないが、それを減らすようにするにはその苦労はいくらか。そうだとすると強める工夫(くふう)減らす工夫の方が、初めの方が一汗をかなければでも面白いに違いないやつ

借りた金は面白い金を、ところで強に他人が汗して得(え)ようとしたら、その面白いのがあるから。しかし

栃木県立図書館

20

毎日毎日の借金で、面白がっているうちに利子のふえた面白いようにどんどん借金がふえるようなことになる。その通りの事がいつまでも毎日毎日とつづくのであるから、そうなると今まで借金取りの目をぬすんでいたふとん屋さらのように怖めしく思えます。

金借しを狸と狐なり

まるで金借しやだでも月を利いて

栃木県立図書館

21

行ったように言うにのも、大抵こういう手あいである。

元利(がんり)揃(そろ)って高い物(もの)

借りた金ならば返すのが当然で、そこに何の不思議もなかろう。返すとなると、元利(がんり)を揃(そろ)えて主(ぬし)に返(かえ)す筈(はず)なのに、何(なに)かと理由(りゆう)を訪(たず)ねられるようなことになるのも人の性であろう。

「或(あ)る日(ひ)」とはまだ浮山金を訪(たず)ねる旬(しゅん)があるか、いずれ機会(きかい)を得(え)て紹介(しょうかい)

コクヨ 10×20

栃木県立図書館

22

十分ことにして、最後（さいご）という七のにみな
よ（人間の真性（しんせい）を詠（よ）って、まことに古今（ここん）の絶唱（ぜっしょう）
かと思われる一句を残（のこ）して、今回は筆（ふで）を結ぶ
ととしよう。
遺（のこ）された留（とど）めて全（すべ）ては面白い。

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館